

豊原西町遺跡発掘調査報告

～三重県松阪市豊原町所在～

2006（平成18）年1月

三重県埋蔵文化財センター

序

今回報告いたします豊原西町遺跡は、櫛田川の下流左岸に位置し、平成17年度主要道路鳥羽松阪線（櫛田橋）道路改良事業に伴って調査を行ったものです。

当遺跡が所在する三重県松阪市豊原町は、近世の伊勢参宮街道が通っており、当時は櫛田川の渡し場となっていたため、茶店や旅籠屋などが建ち並び、後に本陣や伝馬所も置かれて宿場として整備されていたところです。また、古代に遡りますと、大和と伊勢神宮を結ぶ「古代伊勢道」が当遺跡付近を通過していたことがわかっています。この「古代伊勢道」に伴う道路側溝が、豊原西町遺跡の東にある史跡斎宮跡の発掘調査で確認されており、道路幅が約9mであったこともわかっています。

今回の調査では、史跡斎宮跡以西の発掘調査で依然確認されていない「古代伊勢道」の痕跡が見つかることが期待されましたが、残念ながら当該時期の遺構は確認できませんでした。しかし、本発掘調査に先立って行われた範囲確認調査では、当該時期の遺物も出土しており、当調査区付近に「古代伊勢道」跡が眠っている可能性は大きいと考えられます。また、時代は新しくなりますが、近世の遺構や遺物がいくつか発見され、参宮に訪れる人々の往来で賑わっていた頃の一端を垣間見ることができたことは、今回の調査の大きな成果であると考えます。

しかし、一方でこのような遺跡が記録保存という形でしか残せないことは、誠に残念というほかありません。今回得られた成果をどのように活用していくかが、今後わたくしどもの重要な課題であると考えてあります。

調査にあたっては、地元の方々をはじめ、松阪市教育委員会、三重県県土整備部道路整備課、松阪地方県民局建設部などの関係諸機関から多大なご協力と暖かいご配慮を頂きました。文末になりましたが、心より厚く御礼申し上げます。

2006年1月

三重県埋蔵文化財センター

所長 吉水康夫

例　　言

- 1 本書は、三重県松阪市豊原町地内に所在する豊原西町遺跡の発掘調査にかかる報告書である。
- 2 本遺跡の調査は平成17年度主要道路鳥羽松阪線（櫛田橋）道路改良事業に伴い、緊急発掘調査を実施したものである。
- 3 調査体制は以下のとおりである。

調査主体	三重県教育委員会
調査担当	三重県埋蔵文化財センター　調査研究Ⅰグループ
主事	柴山　圭子
調査期間	平成17年5月17日～平成17年5月18日
調査面積	39m ²
- 4 調査にかかる諸費用は、執行委任を受けて三重県県土整備部が全額負担している。
- 5 発掘調査にあたっては、地元の方々をはじめ、松阪市教育委員会、県土整備部道路整備室、松阪地方県民局建設部から多大な協力を得た。
- 6 報告書作成にあたっては、藤澤良祐氏（愛知学院大学）から有益な御教示などをいただいた。記して感謝いたしたい。
- 7 本報告のもととなる記録類および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。
- 8 当報告書の作成業務は、三重県埋蔵文化財センター調査研究Ⅰグループおよび支援研究グループが行った。また、本文の執筆・写真撮影・全体の編集は柴山が行った。

目　　次

I	前言	(1)
1	調査の契機	
2	調査の経過と法的措置	
3	調査と記録の方法	
4	整理作業の方法	
II	位置と歴史的環境	(2)
III	層位と遺構	(7)
IV	出土遺物	(7)
V	調査のまとめ	(9)

挿図一覧

第1図 遺跡位置図	第4図 調査区平面図・土層断面図
第2図 調査区位置図	第5図 出土遺物実測図
第3図 遺跡周辺地形図および古代「伊勢道」推定ライン	

表一覧

第1表 出土遺物観察表

写真図版一覧

図版1 調査前風景・調査区と参宮街道を臨む	図版3 出土遺物
図版2 調査区全景・調査区西部近接	

凡　　例

(地図類)

- 本書で使用した地図類は、国土地理院発行の1/25,000地形図、松阪市都市計画図である。
- これら地図類は、国土調査法の日本測地系による座標第VI系(旧国土座標)で表現されているものであるため、平成14年4月から施行されている世界測地系・測地成果2000には対応していない。
- 挿図の方針は全て座標北で示している。なお、磁針方位は西偏 $6^{\circ}30'$ 、真北方位は西偏 $0^{\circ}17'34''$ (平成10年)である。
- 国土地理院発行の地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の2万5千分1地形図を複製したものである。(承認番号 平17部複、第148号)

(遺構類)

- 土層図は、層の区分を実線で、調査区壁面および採録深度に相当する部分を一点鎖線で表現している。
- 土層図の色調は、小山正忠・竹原秀雄編著 新版標準土色帖(日本色研事業株式会社 1967年初版、2003年第23版)を用いた。
- 当報告書の遺構番号は、通番としている。
- 遺構番号の頭には、見た目の性格によって、以下の略記号を付けている。
p i t ピット、柱穴

(遺物類)

- 当報告での遺物実測図類は実物の1/4を基本としている。それ以外の縮尺のものはその都度指示している。
- 当報告書での用語は、「わん」は「椀」に統一している。
- 遺物観察表は、以下の要領で記載している。

番号.... 挿図掲載番号である。

実測番号.... 実測段階の登録番号である。

様・質.... 「土師器」「須恵器」「陶器」といった区分をここに示した。

器種など.... 遺物の器種を示す。

グリッド.... 調査時に設定したグリッド名を記した。

遺構・層名.... 遺物の出土した遺構や層名を記した。

法量(cm).... 遺物の法量を示す。(口)は口縁部径、(底)は底部径、(高台)は高台部径を示す。なお、数値はそれぞれの部位の最大径であり、内法や、実測段階での「接地点」ではない。

調整・技法の特徴.... 主な特徴を外面(外:)、内面(内:)で示した。「A→B」はAの後にBが施されたことを示す。

胎土.... 小石などの混和材を除いた素地の緻密さを「密～粗」で区分した。

色調.... その遺物の代表となる色調を記載した。表記は、前掲 新版標準土色帖 に據る。

残存度.... その部位を12分割した際の残存度を示した。6/12は約半分、12/12は全体が残っていることで、この場合は「完存」と記した。

特記事項.... 遺物の特徴となる事項を記した。

(写真図版)

- 挿図と写真図版の遺物番号は、対応している。
- 遺物の写真図版は特に断らない限り縮尺不同である。

I 前 言

1 調査の契機

ここで報告する調査記録は、(主)鳥羽松阪線(櫛田橋)の道路改良事業に伴って実施したものである。

当県道は、松阪市豊原町地内で伊勢参宮街道と交差する。この交差点の南側にある「櫛田橋」の老朽化のため、継続して事業が行われてきた。

さて、当地は上述したように近世伊勢参宮街道に隣接することもあるが、古代の大和と伊勢をつなぐ「伊勢道」の推定ラインが通る場所としても注目されるところである。多気郡明和町に所在する史跡彦宮跡の発掘調査では、幅9mの「伊勢道」(通称奈良古道)が確認されているが、当地以西では現在のところ発見された例はない。

今回の事業地内で、「伊勢道」が確認できそうな場所について松阪建設部と協議を行い、範囲確認調査及び本発掘調査を実施することとなった。

2 調査の経過と法的措置

a 発掘調査の経過

発掘調査は、平成17年5月17日から開始し、翌日の5月18日に調査が完了した。

b 文化財保護法などにかかる諸通知

当遺跡発掘調査にかかる文化財保護法関係の諸通知は、以下により行っている。

発掘通知(三重県文化財保護条例第48条第1項、県知事→県教育長)

・平成17年5月9日付け松建第431号

発掘調査の実施報告(文化財保護法第99条の2第1項、県埋蔵文化財センター所長→県教育長)

・平成17年5月17日付け教理第50号

文化財発見・認定通知(遺失物法、県教育長→松阪警察署長)

・平成17年6月15日付け教委第12-4-14号

3 調査と記録の方法

a 挖削の方法

今回の調査は、表土から中世の遺構検出面直上まで重機で掘削を行った。その後遺構検出を行い、遺

構は全て人力で掘削した。

b 地区設定

調査区は、幅約3mの線掘りであったため、調査区中央に4m間隔で杭を打ち、その杭を基準に樹木で区切った小地区(グリッド)を設定している。なお、ここで設定した小地区方眼は、国土座標軸とは無関係である。

名称は北から数字、西からアルファベットを付け、それぞれの北西隅交点をその小地区の符号とした。

c 遺構図面

調査区の平面図は、1/40で手書き実測した。調査区西壁の土層図は、1/20で作成した。

d 写真撮影

遺構関連の写真は、6×9版(プロニー)で撮影し、細かな記録には35mm版を撮影した。それぞれのフィルムは白黒とスライドを同時に作成している。

4 整理作業の方法

a 遺物類

発掘調査を実施した平成17年度に、発掘調査担当者が報告書掲載用遺物と未掲載遺物に区分した。このとき、平成16・17年度に実施した当事業にかかる範囲確認調査で出土した遺物も同時に区分した。

報告書未掲載遺物は袋詰めにし、整理箱に収納後、専用収蔵庫へと搬入した。掲載遺物は実測図を作成し、同年度に報告書作成のための観察や図版作成を実施した。その後、報告書掲載順に収蔵し、報告書完成後の利活用に備えた。また、実測図そのものも、記録保存の一環として保存している。

また、掲載遺物のうち主だったものについては、報告書用の写真撮影を6×9版で実施した。

b 記録類

発掘調査にかかる記録類は、調査関連図面(平面図・土層断面図など)、遺構カード(1/40縮尺)、調査日誌、写真類がある。これらは所定の番号を与え、当センター専用収蔵庫に保管している。

II 位置と歴史的環境

1 位置

豊原西町遺跡(1)は、松阪市豊原町に位置する。豊原町は櫛田川河口から約6kmほどの左岸に所在し、町の中央を伊勢参宮街道が通る。

2 歴史的環境

当遺跡が所在する松阪市豊原町は、中世には伊勢守護領、後に北畠氏支配下となる。また、天正12(1584)年には蒲生氏支配となり、同19(1591)年に津城主富田氏に歸し、慶長13(1608)年に藤堂高虎の所領となり、以降津藩領に属した。享保13(1728)年には一部が和歌山藩領となった。伊勢参宮街道沿いには旅籠屋や茶屋が点在し、街道筋として栄えた⁹。

ここでは当遺跡の周辺で行われた発掘調査の成果から、古代～近世を中心に概観する。

(1) 古代

当遺跡の西方約500mに所在する、琵琶塙内遺跡(2)では、奈良時代末から平安時代前半の掘立柱建物や井戸などが確認されている¹⁰。また、その西部丘陵にある天王山遺跡(3)では、古墳9基をはじめ竪穴住居15棟、掘立柱建物10棟など、飛鳥・奈良時代の遺構や遺物が数多く検出されている¹¹。

大川上遺跡(4)では、底部外面に「神宮寺」と墨書きされたものをはじめ、9世紀後半の土師器杯がまとまって出土している¹²。

櫛田川右岸の古曽通りB遺跡(5)では平安時代末期の土坑が検出されている¹³。また、試掘調査で当該時期の土師器杯が出土した古曽通りA遺跡(6)内には、明治19(1886)年の「伊勢國飯野郡早馬瀬村全図」で、神社があったことが記載されている¹⁴。

横地高畠遺跡(7)では奈良時代の竪穴住居1棟と土坑2基¹⁵が、横地西ノ塙内遺跡(8)では平安時代の掘立柱建物10棟などが見つかっている¹⁶。

(2) 中世

当遺跡の北には櫛田遺跡群(9)が存在し、かん志ゆう地区では鎌倉時代の掘立柱建物や溝、池ノ端地区では室町時代の土坑墓や溝、竈などが検出され、土師器の皿や鍋、藏骨器などが出土している¹⁷。

山添遺跡(10)では、鎌倉・室町時代の掘立柱建物や石積み井戸が検出されており、中世の集落跡と考えられている¹⁸。

また、山添遺跡の南方の丘陵上には、興国3(1342)年に落城するまで南朝側の重要な軍事拠点として機能を果たした神山城跡(11)がある¹⁹。

櫛田川右岸に目を向けると、古曽通りB遺跡では掘立柱建物や井戸、土坑などが見つかっている。また古川遺跡(12)では、鎌倉時代の掘立柱建物1棟や石組み井戸4基が検出されている²⁰。その他にも、横地西ノ塙内遺跡では鎌倉時代の掘立柱建物1棟や溝、土坑などが検出され、土師器の甕や山茶碗などが出土している。また、中の坊遺跡(13)では、室町時代の土壘や区画溝と考えられる大溝2条、井戸2基などが確認され、有力階層の屋敷跡の存在が推定されている²¹。

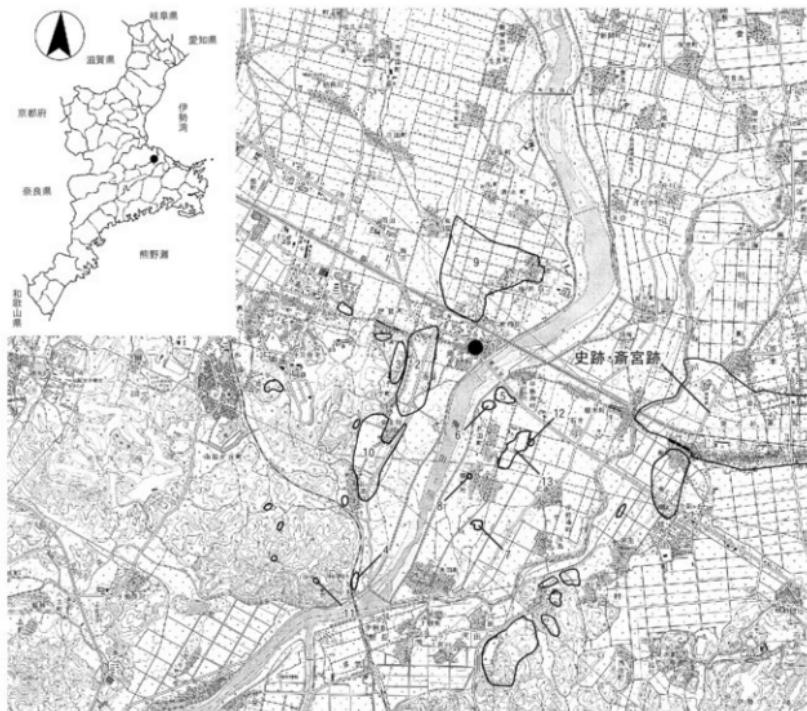
(3) 伊勢街道関連²²

豊原町を通る伊勢参宮街道は、東海道と日永の追分(四日市市)で分歧し、伊勢神宮に至る街道である。この街道は、ほぼ伊勢湾岸に沿って南北に続く幹線道路であり、伊勢詣での往来だけではなく、頻繁な物流も行われていた。

豊原町の西隣上川町との境は、旧飯高・飯野両郡との境で、伊勢街道はこの上川町から豊原町へと入る。豊原町の西端は、旧伊賀町村で、明治7年に陰陽村とともに豊原町となっているが、江戸時代初期以来、独立した村を形成していた。同村は、近世後期の地誌である「勢陽五鈴遺書」「飯野郡 伊賀町」のうちに、かつて街道筋に茶屋があったことが記されている。

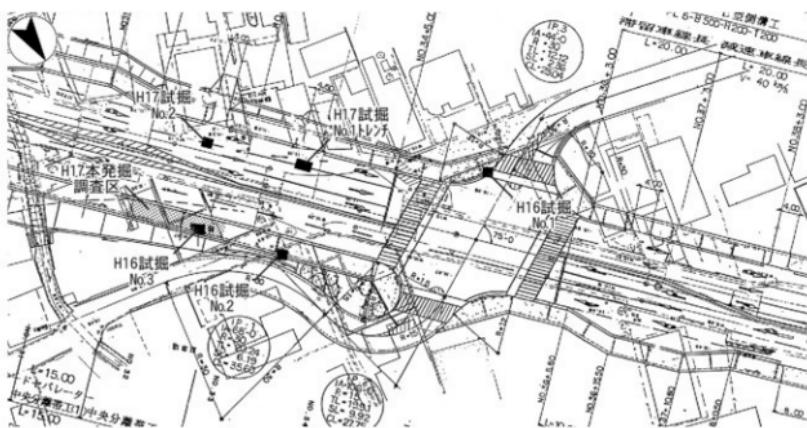
街道は、伊賀町から豊原に入り、櫛田川の渡し場に至る。寛延3(1750)年に刊行された「伊勢路のしるべ」に、当時はまだ宿駅としての機能がなかったと記されているが、その後旅籠屋が建ち並び、本陣・伝馬所・高札場・小寄所等も置かれて、急速に宿場町として整備されていったようである。

櫛田川は、「勢陽五鈴遺書」のうちに、渴水期には板橋、増水期には舟で旅人を渡し、それぞれ橋

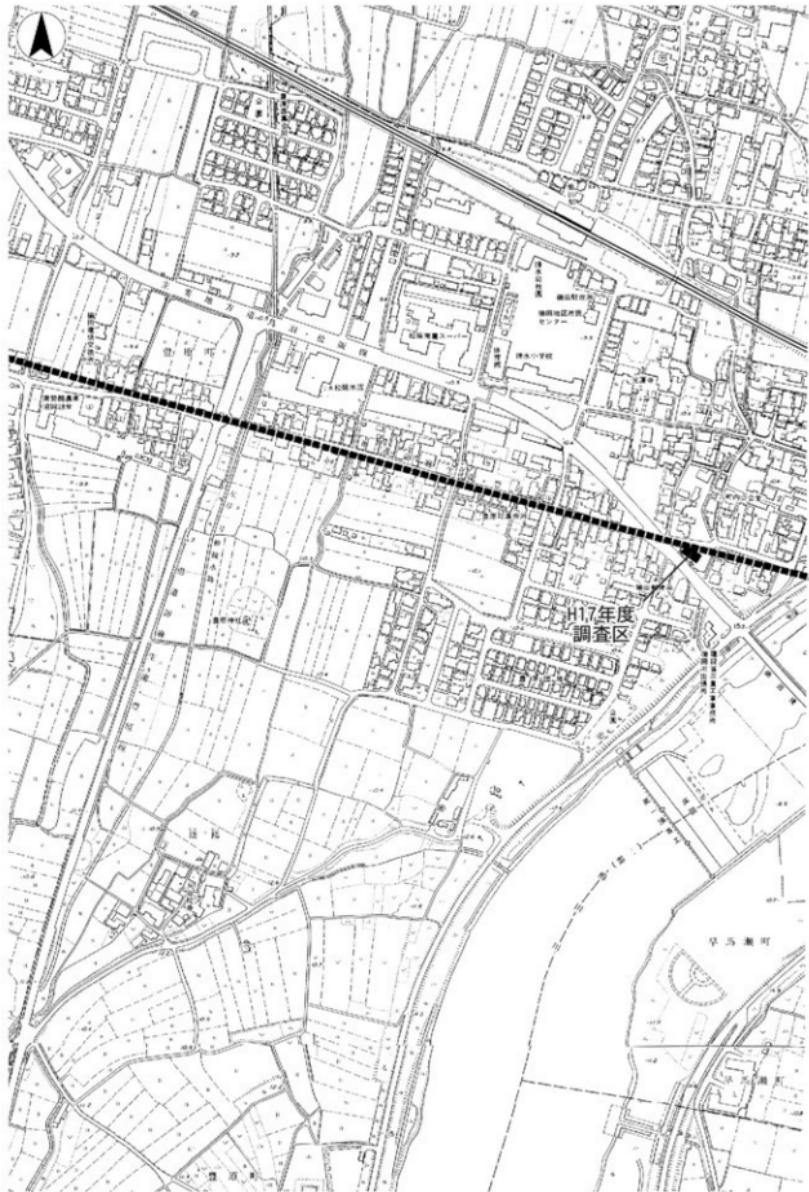


第1図 遺跡位置図 (1 : 50,000)

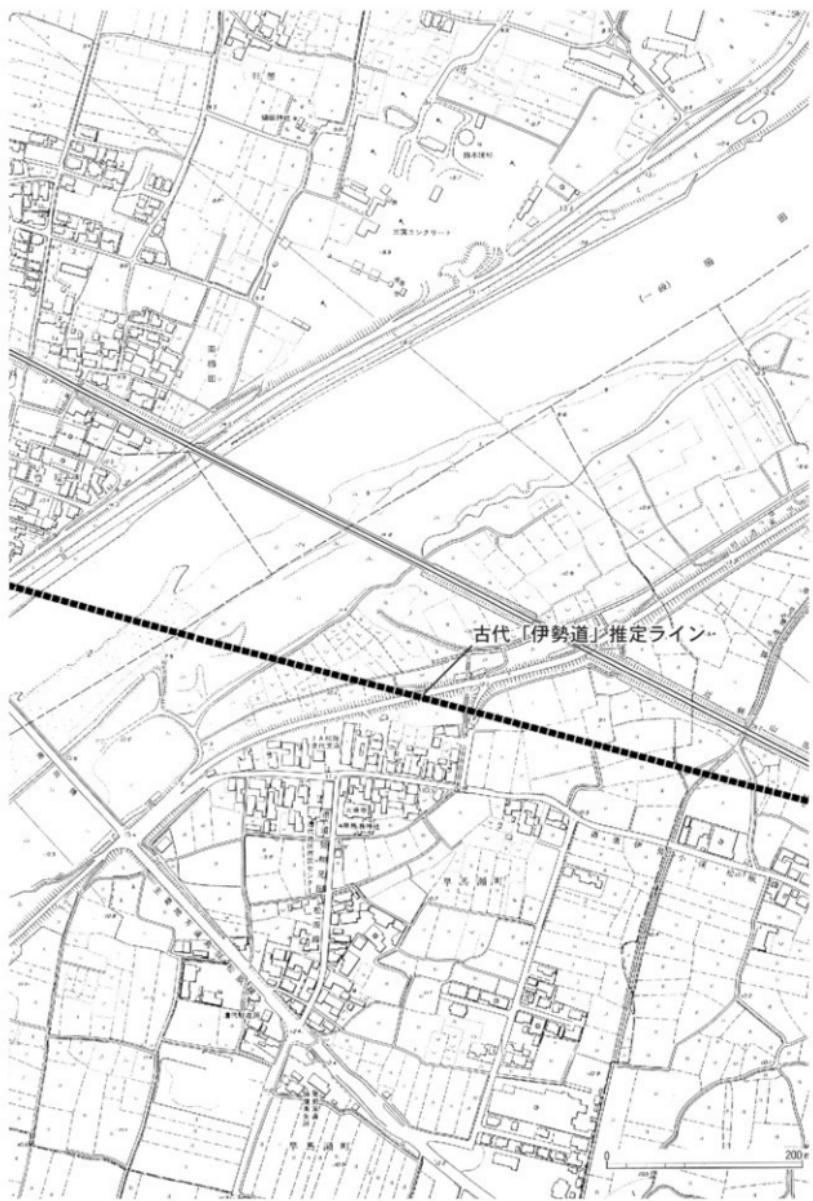
国土地理院「松阪」(1 : 25,000) より



第2図 調査区位置図 (1 : 1,000)



第3図 遺跡周辺地形図および古代「伊勢道」推定ライン(1:5,000)



錢・舟銭を徵収していたとある。この櫛田川を渡る

(註・参考文献)

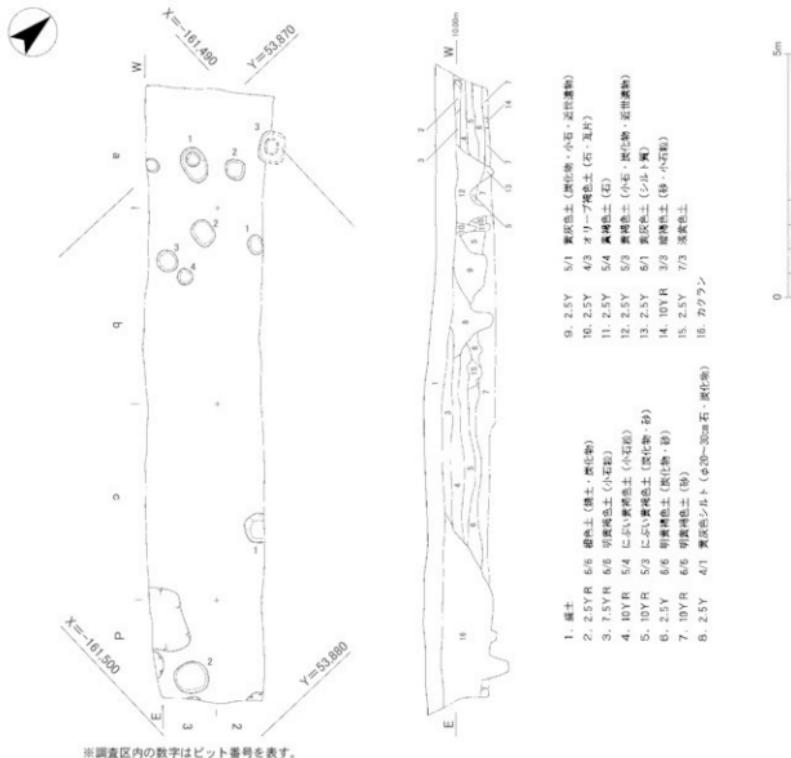
- ① 『日本歴史地名大系第24巻 三重県の地名』(1983年、平凡社)
- ② 三重県埋蔵文化財センター『琵琶塚内道路〔第2次〕発掘調査報告』(1999年)
- ③ H15年度三重県埋蔵文化財センターの調査に拠る。
- ④ 三重県埋蔵文化財センター『大川上遺跡発掘調査報告』(1999年)
- ⑤ 以下、古墳通りB遺跡については、下記の文献による。

 - 三重県埋蔵文化財センター『古墳通りB遺跡・古墳通り古墳群発掘調査報告』(2000年)
 - ⑥ 三重県埋蔵文化財センター『三重県埋蔵文化財センター年報8』(1997年)
 - ⑦ 三重県埋蔵文化財センター『横地高畠遺跡発掘調査報告』(1998年)

と、古墳通りB遺跡などが所在する早馬瀬に至る。

⑧ 以下、横地西ノ堀内道路については下記の文献による。

- 三重県埋蔵文化財センター『横地西ノ堀内道路発掘調査報告』(1999年)
- 三重県埋蔵文化財センター『柳田地区内遺跡群発掘調査報告』(1997年)ほか
- 三重県教育委員会『山添遺跡発掘調査報告』(1979年)ほか
- 『日本城郭体系10、三重・奈良・和歌山』(1980年、新人物往来社)
- 三重県埋蔵文化財センター『古川遺跡・山口遺跡発掘調査報告』(1996年)
- 三重県埋蔵文化財センター『中の坊遺跡発掘調査報告』(1997年)
- 三重県教育委員会『伊勢街道－歴史の追跡調査報告書』(1986年)



第4図 調査区平面図・土層断面図 (1:100)

III 層位と遺構

1 調査区の基本層位

調査区は、標高約10.6mの自然堤防上に位置する。現況はもともと宅地であった場所で、住宅の解体後に盛土を行った形跡がある。

調査区の層序は西壁の状況を観察し、記録を行った。基本層序は、第1層が盛土、第2層は小石を多く含む明黄褐色土、第3層はこれも小石を含むにぶい黄褐色土、第4層は炭化物や砂が混じるにぶい黄褐色土、第5層は炭化物・砂混じりの明黄褐色土、第6層は砂混じりの明黄褐色土で、この第6層上面で検出を行った。なお、近世の遺構は第2～3層上面から切り込んでいるようである。

2 検出した遺構

当調査区は、伊勢参宮街道に面する宅地跡であつ

たことから、近世以降の遺構や墳乱坑が数多く確認された。また、当初期待された、古代「伊勢道」に関連する遺構は検出できなかった。

今回の調査区で検出した遺構は、中世以降と考えられるピットのみである。出土遺物が非常に少なく、限られた範囲であったため、掘立柱建物としてのまどまりは確認できなかつたが、建物に伴う柱穴である可能性を有すると考える。

また、北壁際で近世の埋甕を2基確認した。いずれも常滑産の大甕が埋められており、このうちc 2グリッドで検出したp i t 1では、近世の遺物が、埋甕内底部付近からまとめて出土した。

IV 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、整理箱にして約5箱である。時期は中世以降のものである。

以下では、主な出土遺物について時期別に記述する。また、平成16・17年度に実施した範囲確認調査で出土した主な遺物についても、最後に記述した。

なお、遺物個々の詳細については、出土遺物観察表（第1表）を参照されたい。

1 中世の遺物

a 包含層出土遺物（11～13）

11～13はいずれも土器器の鍋で、包含層からの出土である。11は口縁部を折り返し、ヨコナデを施しているもので、伊藤裕偉氏による編年³の第1段階bに相当する。12・13は口縁部の断面形が三角形状を呈するもので、これらは第4段階bに相当する。

2 近世以降の遺物

a p i t 土出土遺物（1～9, 18）

1～9は調査区東部のc 2グリッドp i t 1から出土したものである。これらは、土中に埋められた

常滑産の大甕内の底部付近から一括して見つかった。

1～4は土器器の皿である。口縁部に油煙が付着していることから灯明皿として使用したものであろう。5は茶釜蓋である。6は土器器の片口鉢で、高台がつく。7・8は土器器の焙烙でいずれも外面に煤が付着する。1～8はいずれも南伊勢系のものである。9は信楽産の陶器椀で、畠中英二氏による編年⁴の4期に相当すると思われる。腰部から底部にかけて鉄釉、内面から口縁部には灰釉が施されている。これらの遺物は、いずれも近世前半期のものである。

18は調査区西部のa 3グリッドp i t 1から出土した砥石である。ほぼ全面使用されている。材質は泥岩であると考えられる。

b 遺構外出土遺物（10, 14～17）

10・14～17は包含層および表土掘削時に出土した遺物である。10は南伊勢系の土器器皿である。口縁部に油煙が付着する。14は焙烙の口縁部である。尾張産のものか。19世紀後半頃のものであろう⁵。15は肥前産の陶器皿で、底部外面には墨書き、内面見込部には絵が描かれている。17世紀末～18世紀初頭頃

のものと考えられる。16は陶器碗である。底部外面をのぞいて、ほぼ全体に灰釉が施されており、内面には重ね焼痕が見られる。底部外面に煤が付着する。美濃産のもので、第5～6小期頃のものである。

17は砥石である。

3 試掘出土遺物（19～22）

19は須恵器壺である。頸部から口縁部を欠く。壺Lと呼ばれるもので、奈良時代中頃のものであろう。20は信楽産の陶器小皿である。口縁部外面に油煙が付着することから、灯明皿として使用されたものであろう。19世紀前半頃のものと考えられる。

21は南伊勢系の土師器培塿である。22は擂鉢である。内面に「ウ」のスタンプ文が2個確認できる。いわゆる“ニツ判”と呼ばれるものか。瀬戸産のもので、第11小期に相当する。

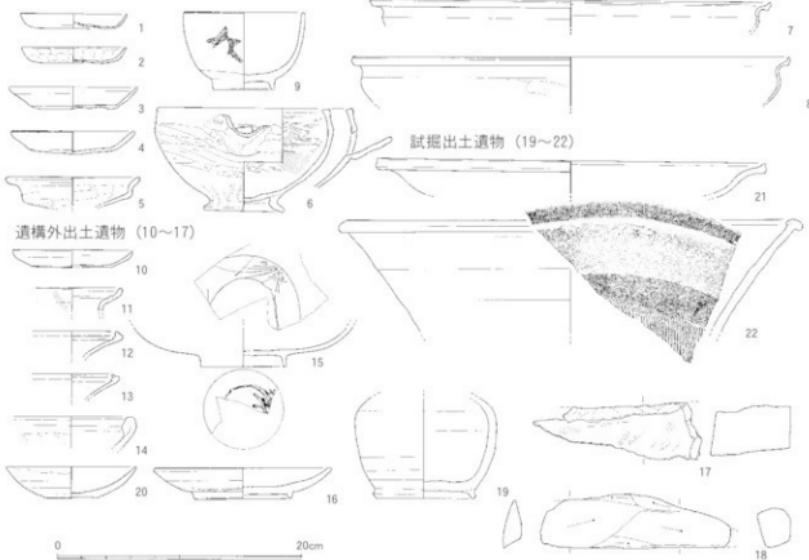
[註・参考文献]

- ① 伊藤裕作「伊勢の中世煮沸用土器から東海を見る」（『鍋と甕、そのデザイン』東海考古学フォーラム 1996年）
- ② 畠中英二『信楽窯の考古学的研究』サンライズ出版 2003年
- ③ 金子健一「尾張出土のボロクについて」（『研究紀要 第4輯』財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター 1996年）
- ④ 以下、瀬戸・美濃産の陶器については、下記の文献による。
藤澤良祐「近世瀬戸焼の生産と流通」（『瀬戸市史 陶磁史編六』瀬戸市 1998年）
- ⑤ 「古代の土器」 郡城の土器集成（古代の土器研究会編 1992年）

No.	出土遺物	器種	法量 (cm)	調整(括弧)の特徴	地土	焼成	色調	残存度	備考	登録No.
1	c 2 p 1 t 1	土師器 壺	口径 高さ 1.2 8.5	外: オサエ・ナデヨコナデ 内: オサエ・ナデヨコナデ	密	—	外面: 暗いYR6/8 内面: 暗いYR2/8	口縁部に櫛付着 油煙付（近世）	001-04	
2	c 2 p 1 t 1	土師器 壺	口径 高さ 1.2 8.6	外: オサエ・ナデ 内: オサエ・ナデ	密	—	赤い物 7.5YR5/4	口縁部に櫛付着 油伊勢（近世）	004-06	
3	c 2 p 1 t 1	土師器 壺	口径 高さ 1.8 10.6	外: オサエ・ナデヨコナデ 内: オサエ・ナデヨコナデ	密 雲母多く含む	—	外: 暗い3.5YR7/8 内: 暗い5YR2/8	口縁部に櫛付着 油伊勢（近世）	001-03	
4	c 2 p 1 t 1	土師器 壺	口径 高さ 1.9 10.2	外: オサエ・ヨコナデ 内: オサエ・ナデヨコナデ	密	—	赤い物 7.5YR7/4	口縁部 4/12 外面部に櫛付着 油伊勢（近世）	004-03	
5	c 2 p 1 t 1	土師器 蒸器	口径 高さ 11.0	外: ケズリ・ヨコナデ 内: ケズリ・ヨコナデ	密	—	HN5/0	口縁部 6/12 油伊勢（近世）	004-02	
6	c 2 p 1 t 1	土師器 高台付片口瓶	口径 高さ 8.4 14.2	外: ケズリ工具マーク・ケズリ 内: ヨコナデ・貼付けナデ 8.6 11.8	密 ~0.3mmの砂粒 含む	—	外面: 淡い2.5YR5/4 内面: 淡い黄褐色10YR 7/3	口縁部 3/12 高台部 3/12 油伊勢（近世）	003-01	
7	c 2 p 1 t 1	土師器 塔塔	口径 33.0	外: オサエ・ヨコナデ 内: ナデ・ヨコナデ	密	—	暗い5YR6/6	口縁部 2/12 背面に櫛付着 油伊勢（近世）	004-04	
8	c 2 p 1 t 1	土師器 焰燒	口径 36.0	外: ケズリ・ヨコナデ 内: ケズリ・ヨコナデ	密	—	暗い10YR8/2	口縁部 1/12 外面部に櫛付着 油伊勢（近世）	004-05	
9	c 2 p 1 t 1	陶器 瓶	口径 高さ 10.0 8.6	外: ロクロ使用 内: ロクロ使用	密	—	赤褐色 2.5YR5/3 褐色 2.5YR5/4 10YR8/2	口縁部 3/12 高台部 3/12 油伊勢（近世）	004-01	
10	c 3 包合層	土師器 壺	口径 高さ 1.4 9.5	外: ナデ・ヨコナデ 内: ナデ・ヨコナデ	—	~0.3mmの砂粒 含む	赤 5YR6/6	口縁部に櫛付着 油伊勢（近世）	001-05	
11	b 3 包合層	土師器 壺	—	外: ナデ・ヨコナデ 内: ナデ・ヨコナデ	—	~1.0mmの砂粒 含む	外: 明瞭灰 5.5YR7/2 内: HGS10YR8/2	口縁部 小片 油伊勢（中世）	001-10	
12	b 3 包合層	土師器 壺	—	外: ナデ・ヨコナデ 内: ナデ・ヨコナデ	—	~0.3mmの砂粒 含む	外: 暗い5YR7/2 内: 暗い5YR8/3	口縁部 小片 背面に櫛付着 油伊勢（中世）	001-07	
13	表土層削	土師器 壺	—	外: ナデ・ヨコナデ 内: ナデ・ヨコナデ	—	—	外: 暗い5YR7/2 内: 淡い10YR8/3	口縁部 小片 油伊勢（中世）	001-08	
14	b 3 包合層	土師器 焰燒	—	外: ヨコナデ 内: ヨコナデ	—	やや密 雲母多く含む	外: 暗いNAs14 内: 淡い5YR6/6	口縁部 小片 背面に櫛付着 油伊勢（中世）	001-09	
15	d 3 包合層	陶器 高台	7.1	外: ロクロ使用・削り出し高台 内: ロクロ使用	密	—	赤褐色 2.5YR5/2 褐色 2.5YR6/3	高台部外面に櫛付 油伊勢（近世）	001-06	
16	d 3 包合層	陶器 高台	14.0 2.3 7.6	外: ロクロ使用・削り出し高台 内: ロクロ使用	密	—	赤褐色 10YR5/1 褐色: 淡い5YR7/3	口縁部 1/12 高台部 6/12 油伊勢 美濃産	001-02	
17	d 3 包合層	石器 砥石	長さ 13.8	—	—	—	—	重量 470g	003-02	
18	a 3 p 1 t 1	石器 砥石	長さ 15.6	—	—	—	—	重量 218g 鉄刃	003-03	
19	H16年度試掘 No.3	陶器 壺	高台	8.4	外: ロクロナデ・ロクロケズリ —貼付けナデ 内: ロクロナデ	—	やや密 ~0.3mmの砂粒 含む	HN6/0	高台部 3/12	002-03
20	H17年度試掘 No.1トレンチ	陶器 小皿	口径 高さ 10.6 3.2	外: ロクロナデ・ロクロケズリ 内: ロクロ使用	密	—	赤褐色: 淡い5.5YR6/3 褐色: 淡い5YR5/2	口縁部 8/12 底部 8/12	口縁部に櫛付着 油伊勢	001-01
21	H17年度試掘 No.1トレンチ	土師器 焰燒	口径 32.0	外: ナデ・ヨコナデ 内: ナデ・ヨコナデ	—	—	外: 暗い5YR5/2 内: 淡い5YR6/4	口縁部 2/12 油伊勢（近世）	002-01	
22	H17年度試掘 No.1トレンチ	陶器 焰燒	口径 38.0	外: ロクロナデ・ロクロケズリ 内: ロクロナデ	密	—	赤褐色: 明赤褐 5YR5/6	口縁部 2/12 内面にスタンプ 貼付け	002-02	

第1表 出土遺物観察表

p i t 出土遺物 (1~9, 18)



第5図 出土遺物実測図 (1:4)

V 調査のまとめ

ここでは、今回の調査で確認した遺構・遺物について若干のまとめを行う。

当発掘調査の契機となった平成16年度の範囲確認調査において、奈良時代中頃の須恵器壺(19)が出土したこと、および、多気郡明和町に所在する史跡齋宮跡で確認された、古代伊勢道の延長が当該調査区付近にあたることなどから、当初、道路側溝やそれに連関する遺構の検出が期待された。しかし、今回の調査で検出した遺構は中世以降のもので、古代に相当する遺構や遺物は確認できなかった。

ただし、今回は非常に狭い範囲の調査であったことから、今後も当該地区付近の調査に注目するとともに、「伊勢道」の存在を強く意識しておく必要があると考える。

中世では、明確な遺構は検出してないが、調査区北部でいくつかの時期不明ピットが確認され、この近辺で南伊勢系土師器の鍋(11~13)などが出しました。のことから、当調査区の北西部から調査区外

に、当該時期の集落跡が広がるものと考えられる。

また、前述したように、当遺跡の所在する近世の豊原町は、柳田川の渡し場があったことから、参宮街道沿いに旅籠屋や茶屋などが建ち並び、宿場として整備されていたところでもある。今回調査した場所は、以前 紅葉屋 という旅籠が建っていた西隣にあたる。この 紅葉屋 の建築年代は明確ではないが、平成9年度の調査^①では、主要部分が江戸末期(19世紀後半)の建設であろうことが指摘されている。今回出土している近世の遺物は、17世紀~18世紀頃のものが中心であるが、19世紀代のものも認められる。したがって、直接 紅葉屋 に連関するか否かは不明であるが、当時参宮街道沿いを賑わした何らかの建物に伴うものであると考えられる。

(註・参考文献)

① 三重県教育委員会『伊勢街道-歴史の道調査報告書』(1986年)

② 松阪市教育委員会の調査(平成10年2月)に据る。

図版 1



調査前風景（西から）



調査区と参宮街道を臨む（東から）



調査区全景（東から）



調査区西部近接（西から）

图版 3



出土遗物

報告書抄録

ふりがな	とよはらにしまちいせきはつくつちょうさほうこく							
書名	豊原西町遺跡発掘調査報告							
副書名								
卷次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	263							
編著者名	柴山圭子							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL 0596-52-1732							
発行年月日	2006(平成18)年1月5日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
とよはらにしまちいせき 豊原西町遺跡	とよはら さかうし 市 とよはら まち 豊原町	24204	13A-34	34° 34' 40" 付近	136° 35' 55" 付近	20050517 20050518	39	平成17年度(主)鳥 羽松阪線(櫛田橋) 道路改良事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
豊原西町遺跡	集落跡	中世 近世以降	ピット ピット	土師器鍋 土師器皿・陶器			古代「伊勢道」推定地	
要約	今回の調査では、中世以降の遺構・遺物を確認した。とくに伊勢参宮街道沿いを調査したことから、近世のものが中心で、当時街道を賑わした建物に伴うものと考えられる。							

三重県埋蔵文化財調査報告263

豊原西町遺跡発掘調査報告

～三重県松阪市豊原町所在～

2006(平成18)年1月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター
印刷 (有)第一プリント社
